

第6 研究活動

1 研究費の配分に関する組織

(1) 組織

企画委員会において、配分方法及び配分額を審議決定し、教授会に報告する。

(2) 研究費の配分方法

ア 配分方法、過去の配分記録

(ア) 教員研究費

旅費については、予算単価により配分されており、需要費及び備品購入費については、学長3.0、教授3.0、助教授2.0、講師2.0及び助手1.0の比率により配分している。なお、年度別・費目別の研究費は、表6-1のとおりである。

表6-1 年度別・費目別研究費 (単位：千円)

費目	6年度	7年度	8年度	9年度	10年度	11年度
旅費	1,607	2,270	2,365	2,802	2,808	2,828
需要費	6,404	9,363	9,692	11,995	11,995	11,995
備品購入費	3,230	4,715	4,880	6,035	6,035	6,035
合計	11,241	16,348	16,937	20,832	20,838	20,858

(イ) 共同研究事業費

複数の教員等が、共同で1つのテーマを長期間かけて研究し、授業や地域社会に役立たせることを目的に、平成7年度に事業を創設した。予算額は、研究課題ごとの要求内容を財政担当課が査定し、決定されるが、毎年度3,800千円を確保している。

(ウ) 教員研究員派遣研修事業費 (派遣実績は、63ページ「海外の学会等への参加」を参照のこと)

教員を研究員として外国の大学等へ派遣し、より深い調査研究を行うことを目的に平成7年度から予算化を図り、毎年2人(予算額1,177千円)を派遣してきたが、県の財政再建計画のため、平成11年度から中断されている。

イ 予算配分の問題点

(ア) 費目別分類に規制される教員研究費

研究費は、旅費、需要費及び備品購入費の3費目別に配分されているが、この3費目の分類が時代の流れに即応したものになっていない。文部省の学術情報センターから研究に必要な情報が入手できるシステムが公開されているが、この情報は有

料のため利用料金を支払わなければならない。しかし、この支払いのための費目が上げられていない。また、研究分野によっては、賃金や報償費が必要な場合もあるが、これらの費目も上げられていない。費目に上げられていない経費は研究費からは支払いはできない。このように費目分類の規制によって自由な研究が妨げられている状況がある。

また、上記3費目についても、それぞれ費目総額が規制されている。そのために高額な備品を購入するために、需要費と旅費の一部を備品購入費に割り当てることができない。

このような問題があるので、教員研究費に関する改善策としては、予め決められている費目枠組みを撤廃し、研究活動の結果として費目別支払額がまとめられる方法が望ましいと考えられる。

(イ) 研究費の一定配分の問題点

本学から報告される研究論文は年々確実に増加しており、研究費は有効に生かされていると考えられる。「研究の独自性と自由」は大学における基本的な原則である。従って、研究者としての教員は、お互いの研究テーマ、研究方法は尊重し合っている。そのため自分の研究費に見合った研究テーマを選択するのであるが、いくら興味があっても研究費がある一定以上保証されないと開始出来ない研究や、逆にほとんど研究費を要しない研究のあることも事実である。

研究費の一定配分を原則としながらも、研究者間の融通性を持たせ得るかどうか、本学における研究活動が更に活性化される鍵になると思われる。

(ウ) 研究費の用途の偏り

教員の教育活動・研究活動にとってコンピュータは必須の機械であるが、開学時には設置されていなかった。

しかし、コンピュータは高価であり、教員に配分された備品購入費を全額当てても購入出来ないため、教員間で研究費を融通して購入したことから、本来の研究に必要な備品の購入が出来ない状況となった。そのため、平成10年度及び11年度には、需要費を備品購入費へ振り替える手続きを取り、相当数のコンピュータの購入を行った。なお、自費で購入した教員もいた。

2 紀要に関する組織

(1) 組織

紀要に関する組織は教授会の下に紀要委員会が組織されている（5ページ運営機構組織図参照）。

現在、教員4名と教務係長の5名が構成員である。

(2) 発行状況と編集方針

本学の開学は平成6年であるが、「紀要」は平成7年度に「第1巻」が発行されており、その後は毎年度1巻ずつ発行され、現在までに5巻が発行されている（第6巻は編集
中）。

第1巻は「原著論文」4編のものであったが、第2巻（「原著論文」12、「研究
報告」1）、第3巻（「原著論文」12、「研究報告」4）、第4巻（「原著論文」18、
「研究報告」3）、第5巻（「原著論文」9、「研究報告」3）と次第に充実してきている。

ア 論文形式、審査方式

論文形式は「新潟県立看護短期大学紀要執筆要項」を定め「総説」「原著」「研究
報告」「作成したもので英文による要旨」や「英語キーワード」も要求している。

論文の査読は本学の教員が行っている。「総説」「原著」については2名、「研究
報告」については1名で行っている。

問題点は、内部で審査していることであり、特に基礎的な論文ではその分野に精通
していないと「オリジナリティーがあるのか」「先進的な研究であるのか」が不明な
点である。

外部審査では費用の問題などもあり、取り敢えずは現在の態勢を取らざるを得ない
が将来的にはなんらかの改善措置を講じなければならないものと思われる。

イ 専門分野別論文数

基礎系と看護系に分類すると以下のようなになる。

表6-2 分野別論文数

区	分	基礎系	看護系	計
第1巻 1995	原著論文	3	1	4
	研究報告			
第2巻 1996	原著論文	3	9	12
	研究報告	1		1
第3巻 1997	原著論文	6	6	12
	研究報告	1	3	4
第4巻 1998	原著論文	8	10	18
	研究報告	1	2	3
第5巻 1999	原著論文	2	7	9
	研究報告	1	2	3

ウ 学会誌発表論文要旨の掲載

今までは、学会発表論文の要旨の掲載は「紀要」では行っていない。本学の学術的
な結集が「紀要」であるとすれば、要旨程度は掲載してもよいと思われる。

しかし、予算が限られていることもあるので今後の検討課題となろう。

3 研究活動状況

(1) 構成員の研究成果の発表状況

ア 著作物と学会発表

本学教員の著作物と、学会発表の数を年度ごとに以下に記載する。

表6-3 研究成果の発表状況

	著 作 物					学 会 発 表	合 計
	論文	著書	総説	その他	計		
1994	14	27		9	50	14	64
1995	14	28	8	15	65	15	80
1996	19	38	9	11	77	25	102
1997	21	6	23	12	62	23	85
1998	31	59	5	40	135	17	152
1999	15	5	6	19	45	27	72

イ 学会等への参加に対する配慮措置

原則的に、学会参加は出張であるが、しかし、担当の授業がある時は補講も考えられるが、学生の実習がある場合には、実際的には参加が難しい状況にある。従って、出席できる学会も開催される時期、曜日によって制限される結果となっている。

また、出張扱いなので旅費にも制限があり、遠方で会期の長い学会に参加することにより旅費が足りなくなる場合もあり、いくつもの学会に参加する場合は、最終的には自費で行くことになる。

ウ 海外の学会等への参加

開学からこれまで、海外の学会及び医療機関等への研修に参加した状況は、以下のとおりである。なお、氏名の前の「*」印は、県の教員研究員派遣研修事業費により参加した者である。

1994

佐々木美佐子 米国看護視察研修 アメリカ

1995

*佐々木美佐子 最新医療福祉活動の視察 デンマーク スウェーデン イギリス

*小林ミチ子 看護教育研修の視察 アメリカ

1996

- *杉田 収 第16回国際臨床化学会 イギリス
- 川崎佳代子 国際助産連盟大会 ノルウェー
- *金子史代 米国ホスピス視察研修 アメリカ

1997

- 加藤光寶 Beth Israel Deaconess Medical Centerにおける看護管理 アメリカ
- 田中キミ子 第5回国際セルフケア看護理論学会 ベルギー
- *関谷伸一 第5回国際脊椎動物形態学会 イギリス
- *水口陽子 デンマークの高齢者・障害者福祉施設視察研修 デンマーク
- 渡辺弘之 Intermarriage in Cultural Contexts ベトナム
- Buddhism under the Pol Pot Regime カンボジア
- Social Economic and Poverty ベトナム

1998

- *加藤光寶 *山田正実 小林ミチ子 小林優子 秋山智弥
- 米国医療費抑制下での臨床看護及び看護学教育の現状－視察研修
- － アメリカ
- 佐々木美佐子 カナダ地域看護・看護教育視察研修 カナダ
- 水口陽子 高齢者福祉施設視察研修－在宅ケアシステムと老人ホーム宿泊研修
- － デンマーク
- 渡辺弘之 National University in Hochiminh City, College of Social
- Science and Humanities ベトナム
- National Center of Social Science and Human Studies ベトナム

1999

- 加藤光寶 第4回日・米短期大学国際交流ゼミナール アメリカ
- 田中キミ子 第6回国際セルフケア看護理論学会 タイ
- 渡辺弘之 東南アジアにおける大都市の下層就業層の形成過程
- － ベトナム、カンボジア

(2) 学会活動への参加状況

ア 各教員の加入学会、役員歴

教員の学会(研究会も含む)加入状況は様々であり、1つの学会しか加入していない者もいれば、10以上の学会に加入している者もいる(平均して4～5学会に所属)。

この中で役員となっている者は、各学会で名称が異なるが世話人、評議員、委員長、

委員、理事、支部長、幹事を約4分の1の教員が務めている。このうちほとんどの者は1学会の役員であるが一人で8学会の役員を務めている者もいる。

イ 学会の参加状況

ほとんど毎回参加するという学会は全体の4分の1程度であり、2～3回に1回やたまに参加するという学会が大部分である。中には、所属はしているがほとんど参加していない学会も1割程ある。前記(1)イで述べたような、時期的な問題で参加できない学会があるようであれば、対策を講ずる必要があるものと考えられる。

(3) 共同研究の実施状況

ア 研究期間、共同研究者、研究課題

今まで行なわれた共同研究は、以下のとおりである。

1994

研究者 杉田 収 岡田正彦（新潟大・医）

研究課題名 動脈硬化症診断のための血管モデルの構築と計測技術の研究開発

1995～1996

研究者 佐々木美佐子 飯吉令枝 桑野タイ子 小野澤康子 水戸美津子
金子史代

研究課題名 在宅介護者の看護ニーズと在宅ケアサービスの効果に関する研究

1995～1997

研究者 杉田収 中野正春 関谷伸一 佐藤一範（県立中央病院）
岡田正彦（新潟大・医）

研究課題名 化学発光法による飲料水中の活性酸素様物質の測定

1995～1997

研究者 関谷伸一 中野正春 熊木克治（新潟大・医） 関谷政雄（県立中央病院）

研究課題名 末梢神経における神経束叢の3次元立体構築

1996

研究者 村山ヒサエ 村山陵子 渡邊典子

研究課題名 妊婦の循環器系に及ぼす呼吸法の影響

1996～1997

研究者 水戸美津子 秋山啓子 島村澄江 渡邊典子 桑原洋子
研究課題名 高齢者のsexualityに関する研究

1996～1997

研究者 水戸美津子 杉田収 関谷伸一 桑原洋子 山際和子
研究課題名 在宅ケアを支える住まい環境

1997

研究者 村山ヒサエ 村山陵子 渡邊典子 小林美代子 駒形ユキ子（県立中央病院）小林二二枝（県立ガンセンター新潟病院） 高橋幸子（開業助産婦）
研究課題名 少産時代における里帰り分娩の実態とその変容

1997

研究者 渋谷正子 鈴木ヒロ子 佐藤孝子 中園清（以上県立瀬波病院）
小林ミチ子 加藤光實
研究課題名 リウマチ疾患患者・家族の不安と入院日数の関係

1997～1998

研究者 金子史代 小野澤康子 山田洋子 島村澄江 山際和子
研究課題名 循環器疾患患者の検査及び治療に関連した不安への援助
－心臓カテーテルを受ける患者の不安の分析とオリエンテーションの検討－

1992～

研究者 松井清（明治学院大学） 嘉本伊都子（国際日本文化研究センター）
長岡まり 音喜多かおる（以上HEDC JICA Indonesia） 渡辺弘之
研究課題名 日本社会における異文化状況の比較研究

1998～1999

研究者 加藤光實 小林ミチ子 渋谷正子（県立瀬波病院）
研究課題名 リウマチ疾患患者の退院受容に影響する要因に関する研究

1998

研究者 加藤光實 小野澤康子 田中キミ子 長野勝 村山陵子 飯吉令枝

